



→「さわやかに 柳あおめる北上の……」と詠んだのは石川啄木だが、江戸川の柳も日ごと青みをましてきた。啄木でなくても、なんとなく歌心がくすぐられる。



↑「どこで接～いだ」そんな声が聞かれる春は遠くなった。オオバコ相撲を知っている人も、もう多くない。スーパーマリオだって、いつかそうなるのだろうか？

二月二十五日、金曜日。玄関を出たとたんに風が肌にまとわりついた。

冬の涙をふくんだ風？

いつもの春の、いつもの匂い。この日、東京地方は春一番が吹いたと、その夜の天気予報で知った。

翌日はツクシに会いに出かけた。矢切畑の南の端の西向き斜面の一面に、どこよりも早くツクシが芽を出す場所がある。毎年、だれよりも早くツクシを見るのを私は密かな楽しみにしていた。その日の予定はこれだけで終わるつもりだったが、あまり気分がいいので、鼻歌交じりに江戸川堤防を北に向かい、矢切の渡しに下りた。

「見てみて！ これを」

舟頭さんがいうのと私がいったのがほとんど同時だった。

竹藪の脇に私を連れて行くと、

「なんで彼岸花はいまごろ葉っぱだけを繁らすんだらう」

竹藪で、

ケキヨツ ケキヨツ

ウグイスが啼いていた。

まだ、“ホー”が出ないらしい。

今週のクマ

→クマは3歳になった。人にたとえたら25~6歳、すっかり大人だ。食べ物を前にしたときと、散歩の犬に焼き餅をやくとき以外は、なんとなく大人びて見える。



→2月25日、東の空に入道雲が湧いていた。桜の老木が、あわてていたように見えた。

舟頭さんの小鼻がふくらんでいた。
なにか、いいたそうなきの舟頭さん
の癖だ。

「先に子孫繁栄を済ませ、それからゆつ
くりと自分の栄養を貯めるためかなあ」
「当たり前」

というかわりに、

「人もそういう生きたかをしたいね」

三段跳びどころか、まるで十段跳びの
ような言葉をはいてしまった。

ツクシもそうだが、先に花を咲かせ、
あとからゆつくりと葉を繁らせて栄養分
を貯める。ツクシはスギナの花。スギナ
はツクシの葉っぱなのだ。

丈の低いツクシは、どの草花よりも早
く花を咲かせないと、埋もれてしまう。
反対に彼岸花はほかの草花が枯れるころ
花茎を伸ばし、花が終わってすべての植
物が枯れたところに堂々と細長い葉を広げ
て陽の光をいただく。

人にたとえると子育てが終わった六十
代前後から、やっと自分の人生を生きる
ことができるのと似ていないだろうか。
そのことを気づいているのか、いない
のか。人はツクシにもなれない。彼岸花
のようにも生きられないのだろうか。